

謡曲『井筒』における妄執について

岩間弥菜

第一章 謡曲『井筒』

本論文では、世阿弥作とされている謡曲『井筒』のシテ（主役）である「井筒の女」の抱える妄執について考察する。謡曲とは能の筋書きであり、内容によって幾つかに分類され、『井筒』は夢幻能・鬘物（三番目物）に分けられる。謡曲は『平家物語』や『源氏物語』などの古典作品から題材を得て作られているものが多く、『井筒』も『伊勢物語』から作られた曲である。内容は以下のようになっている。在原寺に立ち寄った旅の僧の前に一人の女が現れ、在原業平とその妻である紀の有常の娘の物語を語る。僧が何者か尋ねると「紀の有常が娘とも、または井筒の女とも、恥づかしながらわれなり」とこたえて姿を消す。その晩の僧の夢の中に業平の形見の衣装を身に付けた「井筒の女」があらわれ、「昔男に移り舞」と言って舞う。井戸の水面に映る自分の姿に業平の面影を重ねて「われながらなつかしや」と言い、僧の夢が覚めるとその姿も消えてしまい、曲はそこで終了する。

曲の中でこの女が語っている業平夫婦の物語は、『伊勢物語』二十三段に当たる。二十三段は、幼なじみの男女が大人になり結婚した後、夫が他の女の方へ通うようになるが、妻が「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」という夫を一途に想い心配する歌を詠み、それに心打たれた夫が妻の元に戻る、という内容になっている。『井筒』の中で「井筒の女」が僧に語った業平夫婦の物語とほぼ一致している。夢幻能において、シテは生前の出来事によって深い妄執を抱いており、自らの妄執について語るることなどによっては成仏するという道を進む。しかし、「井筒の女」が語る物語は、「紀の有常の娘」つまり「井筒の女」にとっていわゆるハッピーエンドを迎えており、その後深い妄執を抱く出来事には思えない。曲の後半部分で業平の装束を身につけ「移り舞」する場面でも彼女の妄執の内容について具体的に明言されてはいない。しかしこの女は仏の導きを願っており、救いを求める想いは強くある。

相良亨氏は『世阿弥の宇宙』の中で、この「井筒の女」の妄執は「亡き夫（業平）への思慕」であり、謡曲の中で語っている物語の時点では幸せだったが、この物語の後に業平と死に別れてしまったことが問題であるため、この女は二度と会えない亡き夫との生前の思い出を語っているとし、佐藤正英氏は「『井筒』をめぐって－夢幻能の構造」の中で、妄執は「業平への恋の情念」であり、この物語の時点ですでに「現実世界に身を置くかぎり充足しがたい絶対願望」が生まれているとしている。妄執が生まれたのが物語の最中か後かが二つの解釈の大きな違いと思われるが、どちらにも共通しているのは、両者とも『伊勢物語』二十三段（謡曲の中で表立って語られている物語）だけに基づいて解釈しているという点である。ところが『井筒』の中には、二十三段以外にも『伊勢物語』から引用されている箇所が幾つかあり、その中でも重要であると考えられるのが十七段と二十四段である。

第二章 『伊勢物語』における妄執について

『伊勢物語』十七段では、訪れがまれな人（業平）に対してその家の主人が「あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待ちけり」と詠み、業平が「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」と詠んで応えるという内容である。二十四段は宮仕えに行き三年帰らない夫（業平）を待ちわびた女が、別の男と結婚の約束を交わした約束のその晩に、夫が帰って来る。女が今夜（別の男と）新枕を交わすことになったと伝えると、夫は去っていく。女は追っていくが追いつけず倒れて、そこにあった岩に指の血で歌を書き付け、その場にむなしくなってしまう、という内容である。どちらも『井筒』では歌の一部が引用されている以外に詳しく語られていないが、二十三段を含めたこれら三つを時系列順に並べ替えると、謡曲の本説である二十三段、十七段、二十四段というような順になる。十七段は他二つに比べてとても短いが、曲中で「あだなりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり。かやうに詠みしもわれなれば、人待つ女とも言はれしなり。」とこの女が語っていることから、『井筒』において重要な意味を持っていると言えるだろう。二十四段からは業平がこの女に詠んだ「あづき弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ」の歌の一部が、「真弓槻弓年を経て」というように引用されている。二十四段で女は「あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる」という歌を詠んでむなしくなってしまう。「あひ思はで」というのは、お互いの思いが通い合わずにすれ違っているという意味だと考えられるが、二十三段で業平と生前の「井筒の女」は幸福な終局を迎えている。その後で二人の間にすれ違いが生じたのだろうか。十七段での歌のやり取りもどことなくかみ合っていないように思える。すれ違いが生じるようになった出来事は二十三段と十七段の間、つまり『伊勢物語』（二十三段・十七段・二十四段）の中では描写されていないと考えることもできるが、十七段より前の出来事、つまり二十三段の出来事に「あひ思はで」と感じるようになった何かがあるからこそ、作者世阿弥は『井筒』の中で二十三段の物語を「井筒の女」に語らせているのではないだろうか。

しかし、前述した通り二十三段は一見幸福な終局を迎えている物語である。この物語の中に、「井筒の女」が「あひ思はで」と感じるようになった原因があるとすると、それは一体どの場面にあるのだろうか。ここで女が詠んだ「風吹けば沖つ白波竜田山、夜半にや君が独り行くらん」と同じ歌が詠まれる派生説話が『大和物語』百四十九段に収められており、こちらも『井筒』で語られているのと非常によく似た内容になっている。『大和物語』では、男が他の女の方へ出かけたふりをして外から隠れて様子を見てみると、妻は「風吹けば」の歌を詠んだ後泣き伏して、お椀の水を胸に当てて熱湯にする。男はたまらず妻の前に走り出て抱きしめる。この後に男がもう一人の女の方へ通わなくなり物語が終わるとするのはどちらの説話も同じである。大きく違うのは妻の心理描写と行動であり、『伊勢物語』の女は「あしと思へるけしきなく」と男から見た様子しか描写されず、歌を詠んだ後

に何か行動を起こしたとも書かれていない。『大和物語』の女は内心嫉妬心を抱いていたが表面上は隠していたという描写があるのに対し、『伊勢物語』の女のここでの心情は不明と言えるのではないか。二人の女の違いは一見すると嫉妬している女・一途で健気な女というようなものに思えるが、『伊勢物語』ではこの物語の後、十七段・二十四段の物語が控えていることを考えると、女の主観的感情が描写されているか、男にそれがストレートに伝わっているかによって分けられているのではないだろうか。二十三段は一見幸福で円満に終了しているように読めるため、『井筒』において女の妄執が捉えづらいが、二十三段で『大和物語』の女のように男に自分の感情をストレートに伝えることができなかつたために、二人の間にすれ違いが生じ、しかもそれを女の方しか認識していなかつたとすると、この物語の中で妄執そのものではなくても、妄執の元が発生したとしてもよいのではないだろうか。

以上をふまえて十七段・二十四段を見てみると、十七段で業平は「年に稀なる人」で女の元に滅多に帰らなくなっており、女がそれでも自分は待っていると歌に詠んでも、男は心変わりを疑うような歌を詠んでいて、思いが通じていないように思える。そのような状態で待ち続けた結果、二十四段ではこの業平の疑念が現実の物になってしまう。待ちわびたというより待ち疲れてしまったのではないだろうか。自分の業平に対する全身全霊の「思ひ」も信じてもらえないままで待ち続けるのには限界があつたのだろう。「別の男と結婚する」と伝えてもあっさり去ってってしまう業平を女は必死に追う。待ちわびたあまり発作的に他の男と結婚の約束をしたが、本心は業平がどうであってもやはり業平にしか向いていないのだという「思ひ」を分かってもらいたかつたのである。それもかなわず倒れて「あひ思はで」の歌を詠んでむなしくなってしまう。人間関係で互いに理解し合う、つまり「あひ思ふ」ためには言葉や行動で自らの考えを伝えあうことが必要である。しかし二十三段の中の「井筒の女」はあくまで業平の視点でしか表現されず、『大和物語』のように男が女の様子を見ていたことを知ることもできなかつた可能性がある。そうだとすれば「井筒の女」にとって業平が浮気をやめた直接的な原因は分からないままである。分からないが、一途に待っていたからであると自分で自分を納得させていたのではないだろうか。「あひ思ふ」ためには自分の心情を言葉や行動によって表現して相手に受け止められねばならないのに、彼女はそのことを知るができず、「待つ」ことでしか自らの「思ひ」を表現できなくなつてしまった。そのために二十三段の時点では潜在的であつたすれ違いの問題が、時を重ねるごとに顕在化し、二十四段の終末（女の死）によって妄執になつたのではないかと考えられる。

第三章 謡曲『井筒』における妄執

「井筒の女」は、夢幻能でよく見られるような恨み事や後悔を語らず、愛執の墮地獄に苦しんでいるといった描写もなく、自らを弔ってほしいと僧に頼むこともしない。ここに『井筒』、または夢幻能そのものの妙といえる部分があるのではないだろうか。夢幻能とい

う様式の上で同じように感じてしまう様々な曲にも、それぞれのシテにしか持ちえない妄執を表現している。世阿弥が「井筒の女」にしか持ちえない「個」を見出し、謡曲のシテとして描いた結果、作者自身後に高く評価することになる『井筒』が生まれた。ではこの「井筒の女」の「個」は妄執として曲の中でどのように表現されて、どのような結末を迎えているのだろうか。

『井筒』で語られる業平夫婦の物語は『伊勢物語』二十三段とほとんど同じだが、二十三段では子供時代、結婚、「風吹けば」と時間の経過順に物語が進んでいるのに対し、『井筒』では里の女に扮する「井筒の女」は「風吹けば」のエピソードの後に子供時代を語っている。この女は業平との間にすれ違いを認識するより前の幼い頃、二人で心を交わして無邪気にしあわせに過ごしていた時間をなつかしくいとしく思い、時間を逆行させるように物語っているのではないだろうか。そして、業平の装束を身にまとった自分自身の姿を井戸の水面に見て、それが自分の姿だとわかっている、業平と二人井戸の水に姿を映して遊んだ時の記憶や業平の面影をなつかしむ。ここで僧の夢が覚めるとともに女の姿も消えて曲は終わる。この女の妄執はどうなったのだろうか。僧の夢と共に女の迷いも覚めて成仏できた、もしくは業平と一体化できたように感じても、この女はそれが自分の姿だと分かっているため妄執は晴れなかった、などというように色々と考えられるが、世阿弥は『九位』で能における幽玄美について「妙と云ば、言語道断、心行所滅なり」としている。『井筒』はこの女の妄執の結末をあえて語らずに、幾通りもの答えを想像させるような余韻を残す終末を描いたことで、『井筒』は、言語で表現することの及ばない「妙花風」の境地に達することができたのである。